

## 【源泉交游】

### 「詭弁」で固めた「中央図書館」構想

「詭弁」とは、道理に合わない、言いくるめの議論。倫理学で、相手の思考の混乱や感情に付け入って相手を騙す、見かけ上は正しそうな、虚偽の推論。間違った内容・意見を正しく見せかけたり、自分の意見に言いくるめようとする話し方のことを指します。とある辞書にあります。

広報まいづる9月号によると、「目指す図書館の姿と今後の取り組みについて」と題して、当局の“思い描く図書館づくり”について「高度な専門情報を蓄え知域社会・地域生活に役立つ『課題解決型図書館』へ変わること」。を中央図書館づくりの筆頭にあげておりますが、果たして。何だか判ったような、解らないような気分させてはいますが、これも「詭弁」の一つと言えます。

例えば「高度な専門情報」とは如何なるものなのでしょうか、どの様な専門分野の情報を整備しようと言うのでしょうか、また数々ある専門分野の内、どの分野の専門を目指しているのでしょうか、一分野の専門情報だけでも膨大なものになりますが、分野を特定できない「高度な専門情報」と言うのであれば、なおさらのこと「市民の図書館」では到底補えられるものではありません。何だか「専門」と言えば高尚に聞こえたり、抽象的に述べればさも広い視点から論じているのかと錯覚させられますが、それが間違いの基なのです。

これは当局の発する「詭弁」のほんの一例ですが、「新たな中央図書館は、市内全域のすべての市民に求められるサービスが提案できる司令塔としての役割を担います。そして、市民が気軽に出会い、つながる交流の場となることや、専門的な本と知識豊かな司書により市民一人ひとりの課題解決を支える、皆さんの生活やまちづくりの役に立つ図書館を目指しています。」(広報まいづる10月号)との記述にもありますが、果たして、この内容をそのままどこまで信用できるものかは多くの疑問を禁じえないものです。

「詭弁」はそれによって気づかないうちに、“論点のすり替え”や命題から逸れた議論が展開されてしまうケースも少なくありません。一見それらしい意見に聞こえますが。「詭弁」は一見すると耳なじみがよく、正当性や常識性にあふれた印象を受けますが、それを使う人の立場や組織的地位のある人であればなおさら、詭弁でも正論のように受け止めてしまう危険があります。当局が述べる「課題解決型図書館」についても「高度な専門情報を有する図書館」についても実像はなく、当局の妄想に過ぎないことであり、現実的には実現不可能な図書館です。無いものをさもさも有るようなものとして幻想を抱かせ、優しく親切そうに語り掛けてくるのは最近はやりの詐欺の手口です。当局は行政と言う立場を利用して、こうした「詭弁」で持論の図書館構想を正当化しようとしていることは、道理に合わないことであり、現代社会では有ってはならないことであり、“市民を欺く反社会的行為”と言っても間違いのないことのように思われます。